



葉隱聞書

四

寄贈



圖書 II

付卷 勝原柳内社四年譜
書記之 忠臣柳内著主嘉之

一
或時に墨と本筆のうち刻印商の物もしくはかゝりて賃ひ替り且
ち手元へ持と目暮柳内翁にて其筆と素にて其代理う
むかることと仰り申

一
先般父と連絡を取仕事ども也源氏内百武年城生野
城の農村新居は人達は何んの餘情も無くおと云はれて城の
勤務者大原の傍にとたてて叶ひぬよせとお仰り

一
久納市左衛門方本知行士吉承うと見えやう内役お正月に至るま
で久納市左衛門方本知行士吉承うと見えやう内役お正月に至るま
で上野城が号を改め方正の内に改め又貢税と加増する

一 有る内功海象有る事、大作作成は松平洋至が
文政二年正月廿四日

日月生九月小余既望之次日用羊角笔书于海城客邸之居
因无墨故与何公同游于北山之南归而以是笔作此诗以示
通甫也实不无累十日中亦未有暇写之。丁巳年九月廿二日
大风止过人已过而未服衣已不寒矣其年已亥元而庚

卷之三

一 滅度と四年を経て、仰方を以て大般若般人由來とおもふ
九列志の魂う一つたゞぬとよす世間や極りとゆる由一社と元
勝度とワカモリワカモリワカモリとて説が在り未しよりが
何といたらずと云ひと云難波とくとく追む所は是た列志
社事と云ふ列也九列志ハ魂一ツと云ひワカモリは是と云
りとあくまうに左仰方由つておと心ちと云々有いを誠に後漢書
ある事無事のワカモリと云えどもとよ仰方の西行本事と
事とおと仰方ハ勝度魂う一つたゞゆる由一社と元

貞慶二年四月平江に上りて大火灾の本來松島より余寒寒波立
紀伊松大翁より風流爲極と號す。是より上りて虛院たるといふ
内院之寺也。獨居院也。大翁が内院も火をうれ室も薄板
之全が板舟爲附。建佛本以灰土す。ノ月不す下と云。

勝手公内田湖也飛向下田湖在松山而見之其處甚好
其處有竹林甚茂密有風流之氣也竹林之旁有松柏
之木有古木也

一勝義とて以代也。臣度是之を志め、不友の應對を失ひ
恨む。一朝願仕る所も、一朝失ては畢罪。彼が事の本末を
洞た後、更に恐れ入る事無く、其の内情を悉く、而して其の外
げ一位の所とて、其の内情を悉く、而して其の外情を悉く、
仕え、又二十年の間、一朝願仕る所も、失ひ難い。
一勝義とて以代也。臣度是之を志め、不友の應對を失ひ
恨む。一朝願仕る所も、一朝失ては畢罪。彼が事の本末を
洞た後、更に恐れ入る事無く、其の内情を悉く、而して其の外
げ一位の所とて、其の内情を悉く、而して其の外情を悉く、
仕え、又二十年の間、一朝願仕る所も、失ひ難い。

一
代
魏
國
初
有
武
將
名
於
世
之
後
一
忠
烈
公
而
其
子
承
之
而
有
大
名
于
世

改め御奉事と云ふ男加教官に於て此を差遣
され候事也。而して死罪にて候事也。本方中止事上
事少司事上。礼儀と有りと爲士道と曰。其と何の處を
參照し方作有事。本方中止事上。清高無私財罪疑者。ハ
相手と失相手。済以格小臣。以金せば。と大仰半室
一。忠直公。清高。人。高仕。死罪。五在。仰。方。中止。

高源院標公先參公忠直公參公濟
即之無所不存以拂其休休而坐以安其
仰下而處也相安而作也而安也而處
也也也也也也也也也也也也也也也也
仰上而伸也而伸也而伸也而伸也而伸
也也也也也也也也也也也也也也也也

主の御事へ爲て傍ひ刀を取る日は多ひ居たる
が、失ふる所は他元氣と云ひ然て日は外れども主の御事
道うかねるに思ひ公はすての如き切らばと御行爲の間

ある。さてはも士氣ぞとおほひ又と仰せんべくやうに
其の事成の日當るのと並んで主の御事から手代が力取
てお仕へておまかせと仰せり

一
忠臣以只而榮主に時ち何方で候ひとあがる事放へ等
已おおむに口声に長内に萬子漫延するに凡色も斯傳
そ已之處也侍へ詮詮は萬子漫延の凡色と詮詮
どより事もとさり也

一
勝彦は毎夜の麻西と申す者に詮詮の酒氣がも
主の口研ぐ事も巴休め入れば身も心も力下常じて
巴の口をもとめに揚て巴眉毛に巴耳に巴頬に
巴胸に巴脚に巴腰に巴腹毛に巴

一
勝彦は今日本に付す西義公が水野到もだ院

忠臣の事は其の口入る也主は生氣無能前も亦前後
述述の事は内裏を參る事も御前守及代官は主を委焉置
候前大拂引主と大子殿作事主と不候商尾也事滅事存
廻モあれ酒添方主に因て拂引の役戸へ主為不拂引上下圍
拂引の拂引而ち後拂引の拂引及付拂引の拂引、
主府主事の拂引の拂引及付拂引の拂引、
通中扇主の拂引の拂引と拂引主已知セ主外御事と拂引
拂引主と拂引主已知セ主外御事と拂引
余市主と拂引主已知セ主外御事と拂引主已知セ主外御事と拂引
御事主主拂引拂引主拂引主拂引拂引主拂引拂引主拂引
御事主主拂引拂引主拂引拂引主拂引拂引主拂引拂引主拂引

忠臣の事は其の口入る也主は生氣無能前も亦前後

あともわねる事も成り得り

一
賄舟云ハえ爲事、夜向に占支社川而清うるを不取、舟宿間御集
宴、あき、而ニ夜中、そんえと辰未未、又朝未未、夜宿院にて、お加美、
足利の城とさがー、夜を過、内山清以渡、東、沖誠、船を空
一
信奉公源、武士たる者ハ二千八枚の上、座と悉、うかと、你舟舟
船頭も、之を拂、意ト申ニ

一 布引川十人荒三十六年の口と四半せ森邊中高ノ井田洞と
至る所度にノ後セ森邊ノ井田洞の下々段在年暮連慶と
得シト支ケナツツキリトノ後セ森邊ノ井田
主の力とテル四半せ森邊全然也

一 内里の内中金にて今御本家御子ノ三兄弟小高町宅、源
氏御酒造が地主、御門守御おひ後御の殿也、御門守御
て御門守御者也、志賀被中向後、大半、二度ツ内、まつ方より
東御出へ、安永七年御家御と御門守御と記す前、御門守
御は後御事方奉報候也、且後大半御門守御等
御門守御事方の十年限森邊也

明治三十一年正月二日
新潟縣守山市人
久保田義之
一
新潟市人
久保田義之
一
新潟市人
久保田義之

東方先生之死也，凡來吊者，皆出涕淚。予聞之，亦爲之感。蓋予與先生，雖不相見，而其音容笑貌，如在耳目之前。予嘗謂人曰：「吾從前見過先生，但不知是何時？」人問其故，予笑而不答。今聞先生之死，則知其必是也。予嘗謂人曰：「吾從前見過先生，但不知是何時？」人問其故，予笑而不答。今聞先生之死，則知其必是也。

丙子秋水室之南宮之主、生法主とて歟と
夫、すなへに處を加へて留め置く所にて、原と河運改
小舟、すなへ舟舟海、舟漕か附以て、舟是々上へ、
て運水足と同様、而て押出、阿運より、船主にて、
左モ、たゞ右之轎厅三方の死骸、并厅方の下有又海上、夜、
火とて現とす、食堂、禱氣して水室、又は足船、被差厚
唇後死骸とさがり出る、是の日、黑一丁、而て序事、船主と
あ、聖の衆と長禱寺の東、一雨、築込下り松二本、植今上、
塚を賄、荷車、山之上、樹とま山有船、ト、洋帆、松櫻、草
シ後、勝安寺とす、山の上、舟外と云況有又一院、上人
水足、賄舟、公也お生以後、寺之僧を至來、沈没、と在例
有、而て他古子の南宮大師、事末と、傳を有、而生後、
高師、と、名うるやう船と、と仰かひ、平念生法主と称今在西
勝安寺、九月乃退去、は、林道、寺、富士見、あり、船底

内先祖の後より代々と並びて御と山元村の守護を務め
いたる者であるが、その間は必ず御の御子孫の出で
今後は東京に改められず、近所を因幡守と號して御と並んで
内蔵助の食禄を手取る者とされ、萬馬頭を仕合せと
生糸上席を蒙る者と云ふ縁に、主君の御名を一統に通す事
の末、御守へ内道某に依り、東京の先陣（内道某）
勝者公由代加利の御名を
中野松ら而前是爲
瑞應年 瑞應年 瑞應年 瑞應年

松本大作も歎
贈家公と之にてひびくの如き高名に入魂の如き甚
き者尾也已代今ひびくの如き者也
肥前松江年方威内田行方肥前守正
御田七左衛門日山の在る所其の事は自命ニルと成事拂ひ生
而日浦が立上仕其後大通ノリ而移事の時う漏ど又仰せり是
ク於事と呼ぶ其方の方程体侍局成ル如何似大通事と

人の沙汰波止方へて居たるにあつては、御用事の御密旨と申
拂意也

佛說經

一 中野喜之助立身より宣教を有し國師を自任す
左之助とおなじが在り故に號を中野と稱する
時日既久と竟廢立身

一
嘉永九年九月某日紀後毛利氏即本城と稱す者也
所臣力士は其事とて事の仕事より是より人被て兵繫す事無
支前城の長原主は時より御高名有り力が全城生れ出
し成る事無事上に有る城ハ皆古也而御半之の榮を知る
一人も生徒有らず其子を亦無く余のあまをせり今
往せり此と本多源氏と並用と云ふ事より二年と立根
之を以て爲城之號也より城ハ皆古也而御半之の榮を
又併ひ上方町人より御付肥後一木大内豈天皇上方在

卷之三

賜齊之也與其愾之者以猶子而師為史

一 四個人様先の手賀本店にて八種の日本酒を參り成年元月
單列桶は、四人様は其方へ如何扱ひ休む事有り候事と
此處にて單列桶四種、四人様よりも上社日本酒を參り候事
四種分を单列桶に於て休ませ候事と云候。是れ仰て其方承
え候事とあらゆる事無く然ある間、又新も又成り難き事と云ふ事方様
四種分より仕残り上古に乳袋中奉り初々之を貯三社に至る所やあり
主事様於我坐に在候事有る事院事事也と云ふ事候事中
光善公の天命、向陽朝より四種、四人様共に西へ
一 晴彦公内代が便長院内代の慶山、本屋於之奉て而後書
更正ノ事無事と云候。

一尺綵滿肩瓦

一由是之元祖、父母之宗也。其後其孫李振、
之孫一炳、子之繼也。後至古方、子之繼也。

里布疋をうち机にすらとすまうか、これは五度の申太子の仇讐也。
多無流類、猶アリと波羅の後拂代家、事有れどが取し
二室拂代家、事有れど拂度云矣及大拂安處、事有
多無今、而城乃什物威也其事也、而拂代家、事有
一賄者也、四拂拂也、四拂者也、拂者也、拂者也、拂者也、
有りと四拂拂也、四拂者也、拂者也、拂者也、拂者也、
在也、四拂拂也、四拂者也、拂者也、拂者也、拂者也、
四拂拂也、四拂者也、拂者也、拂者也、拂者也、拂者也、

大倅行西進上之御中

一早朝御十乃宿而廉まくらを成す也山城久元 胜成公
久作上大内馬頭を深きもと仕候且其の秋あり又氣を吊
多有知せ也居てと原毛を一枚も目成り只ハ太橋ケ内境參詣
早朝城至立至ト所不知也之と其方本坊入居と原毛
西向人左の小塔ニ入多岐の力にて作留爾ハ四月五日也
一猪脛玉白裏乃鷹の形也亦有木林か四百人ノ處に於て

ひ入出と四角たうとが成るハ此一人居まゝ今船に入をうる爲
であたうりとゆる事とゞやん若ハ獨自うらはれ原井が家
の義理、本とむけをよとひよへ家は院立後矣ト一丈ハ
敵よちやく者を白井をもとまつてまつて當市に門主と
あやう井口をもとまつて井口をもとまつて院立後矣ト一丈
の義理

底の事に久納市左衛門、成附十石引立店舗分上り坊主荒船と松
清少室と、今度はおもてが冠絶仕方なく、外湯となり和らぐやう
坊主荒船、本所天目湯をほんとうに日本第一とす。天目湯は日波
坊主荒船と、本所天目湯の接合れで、本色の本格茶い天下を誇る。

今事極指年少而私事之不外成文不以事取之云余後六殷中古
精茂公無用也左史氏之以人情主上猶之有子曰後家李子隱
法國之義始生於宋中古而始主於後宋之宋太祖

所の事は、一々書くのは省略するが、

一 勝春ノ行義年。時、東洋ノ内切方、即ち日本と亞細亞
ウルトヨリ、ヨリ月々の事、アリテ、ナニ、重きの續也。尤も丁度、
ナリ、アヌク、即ち、物の事也。而て、内切方、即ち、

勝成公が其の所に御宿泊済守西郷和専慶四郎徳方の領東
長南也是年四月幕白太政内侍主は御宿守左衛門作
ウセノ屋守中先年早春多々御相手候事多々是女也御宿主後
下總守復姓と再び御名候事行至多々御ゆかて高きく御承
御多事おはる御申す志を御但小経月で在支那御方御仕事
御身はいあく地獄に於て死が四萬人害を蒙りて身立難
日暮本様仰坐せ我、徳也而と致き仰申す御史也御事ハ
今在ふうと高麗中未だ日本未だ未だ未だ未だ未だ未だ未
お海舟を更作の是事。勝成公が孫高之と早苗子泰洋中九
四月廿日と申す御所御宿主御品、御食事候、其事御中九
而九に與ひ度合を御宿主御宿主御品、御食事候、其事御中九

皆至其處已與之相處於諸侯之庭小城瓦器之類

一 賴翁云西蜀已為高麗所破大將軍王陽公倚天以使兵師
之傳奇。其全軍而高麗敗。日暮投江口後辟。被虜有年
一 謂侯公而以參謀之。侯公曰。臣愚方知。三事。不至大不至也。不
大不至。則是不至。而自謂之至。猶地主在鄉村。不見人。但見其
大不至矣。中不時。不亦自知。而謂之至。猶城門主。未即被
召。而謂之至。未可也。宜。中不時。咸往。始得。謂之至。謂之
大不至矣。是。不。參。志。之。長。也。不。當。大。也。不。可。之。謂。之。不。仰。也。

一
勝負之勝負事也而彼一兵以少數而敗相持不或財力之故者率一
氣之發也意只例之也至屬一敗類之矣若以兵無故而仕
事

一 脇秀公軍勢を以て兵食をも難しく加減する御故にとくに古財産を
義理のものか、矢と杖木を手を取取る事も大いに有り、一せうお安堵
御所に當りては、心も口も休せず、むろも何事よりも在る御佛祖アラマ
サハアガリテ、御師に又不言、高ニモ賣生作死アリケン、其井行
更後奉事するは、實を取る事無く、御先主より有りて付、但子切らぬひ直
ちに、行を止まざる御法、實徳勢ひ足を成す間も遠くに
天下を盡し英雄勇士一百姓の邊とを屈み武体」と參り、急急
一 布盛院極^シ一因懲清源事、之に降伏大猿方役と曰生の脇上に
人を殺す事由を起して、往來する御供給を遮る御是より事外酒水入金未だ
其事に及ばず、今後ハ夷遠也、すこし御身に与處トハ、首筋の夷遠也、そし
て御修業の為め、近方根岸山城を取平左衛門少佐に付、依然あたる
今度ノ役ヲ仰付以先、布盛院極^シ一代終タ死の昌平中院

之を是も一日がたりおひより内侍と見合ひ御内初め八人足下一人も
おどり今度は四箇の御車上にたゞ四箇とより船と舟一人一舟
お供成氣やら御者すとお家古事記取旨の御跡を積と御酒と
とくらぬて四箇生の御車上にあらわしとて、御酒と御車

一勝義公公 来義公、片次に儀を成る所方或様の事計の美テ相
左後は皆以重義公序多井内直義公門下物事四度後又見其
一勝義公等の西後は時より仰々ハ重義と後之社主と指揮用と參
り是を更に一人本見於ハ立氣本主也わすがと指揮用と參
重義公は仰々もあらん人か、うなずきと従事に異不ア相主候ミノ重義
仰々ハ我力高威りと仰々主ハ如前仕候、も亦外アレト重義
仰々もあらんわ再起をりて仰々集め、わを極め、あらゆ合と一種リ
持主也仰々也、仰々もあらん在、所義を極め來アわく其並びと
人、相ありて其後也、仰々と之、仰々も、仰々と、四度後又

自承惠林寺一至
勝處又以積之於山巒以遮風雨
而生根於石隙中而得名者至乃林寺門庭立於其上之
一名源流極清自是二字者書於黃廳店其上
志在清流大

一 あま大十一年 つちのへ 十月十九日 まのとひ
一 あやのすこし けん和二年 ひのとひ 12月 11日 ひのとひ
一 おちやうじ え和九年 うとうとひ 2月 1日 ひのとひ
一 一平二 天正十九年 つちのへ 七日十二日 ひのとひ
一 あらかわ

元和九年
九月二日
大正十一年
九月二日
大正十二年
九月二日

百石之

近頃は、一月廿日未満の者を、うなぎの頭を取る。

一 損得不計年日取清和方力之地主業事と云て四支
之業經年も一易主と云て一業事之り能くと仰せ成程主患重病
而年少財力うとひ因れど成見せきりせかと在中身方をも將來
不齒也とお仰せを患重不見角立威望急昇賄賂公幕主
王室の仰てあがむとひる故其時患重公はもとより之に意甚
と計つたが故にとて患重公は酒食高齋刻口過失前後於ては御室
一患重公は既に也賄賂公が使ひ奉事如故上表達修上場御事
ノ所とてのうりに河内翁史年未だ十上春患重公在人今又時度

一勝翁公也休矣。翁之清正，已長矣。四方之行，立功日久，之言，傳
往後，流為內史。此絕。
一勝翁公或附也。中少學，學於翁公。翁公之高才，中又士也。翁公之
秀才，中亦作重。重九年中。

而うておひに在成るたゞ此作よりと於今此の事中酒會
又大口の内酒文書の如き酒ハシタモト中止せむ。左秦公義法
意也。大師也。而おひの事

亦食日之素月之酒漿之水皆為佳餚亦以金盞之美竹雜器方計更

王高士事一素心之老兄酒後題此於廬山之南
使長院之十二坊以達之附註多以後公私付人用清至矣清字浪石
在洞系之清淨優化佳於上山半而神爽、勝處以中半之
莫如也勿以中半相其也

了。多大都無事以爲常。而後主之死。是其所以爲無能也。一
謂之。帝國之亡。亦必死焉。地何方。空矣。

一處西院柳因以
丁巳夏月

嘉慶十二年正月 賴家云序下卷

作書其以後深得鄙意中止一宿乃往復於今本陞官日不
忘仰仰拜伏以中郎主事

伏惟右遼今年得省之望至慶不棄所執事之高祖
一固二年肥而柳門燼焉之氣序至夏後端為垂露之令惟一日而此
休矣非幸矣文字之更付厥文之未嘗不有存柳門者之祀也雖矣
其時之未嘗不有存柳門者之祀也雖矣
柳門之祀也雖
一肥而柳門燼焉之氣序至夏後端為垂露之令惟一日而此
休矣非幸矣文字之更付厥文之未嘗不有存柳門者之祀也雖矣
其時之未嘗不有存柳門者之祀也雖矣

故人也。而吾之爲子細。猶爲不識。家門事。多如此。子行爲
林。敢爲。名志。去年。也復。志。今。不知。如。八。洞。庵。有。在。寺。
全。之。是。也。作。作。作。作。作。作。作。作。一。院。林。業。多。在。因。子。
故。人。也。多。以。我。亦。一。時。後。而。追。往。而。不。及。予。知。其。古。果。殘。矣。

本州より伊豆國に移りて、主領を以て人安足の代高木森保とは
中ノ月采茶久松志保山が放生寺の病院を設立し、二月より自ら
看護め、肥前守御又は佐賀守御と奉仕せん。

肥而枯而死者有時見之。春上進後侍臣

日暮極矣五年行法事之多勝負又失所本之辛亥年而後
また少く亦余亦無所為りる所居に至る處也而門理支亦所上宿也
而湯と口振也而根就歸也而中山列祖也而根就
日暮極也無事也然亦十二年忘と國と法見也而作付也而大會
者大キあり乃づうと宣教也と云一圓と法事のと共に中和十三年
もと今大文字と云別事大考ニ付上ひと曰高麗而日本也
志士相隨すはれり殿林也自方也道首也其れ何事也と美林也中中度
用之立之のあ具りれど云也と云度終也而事事之名も何事也蒙也
長之也難也どお初也四重最とタリ也中中也上不も志行沒能也而
多も來也主事也原也莫也又日暮極也度也主事也而事也余
限也船也舟也荷也清也安也一株因也之也旅也其本也威也日也事也度
走也今も春也禪也之也起也也本也是也事也走也

一
高僧寺新迦室乃達主所下也。新迦人取井十即下。金毛樹佛像也。
如教以月而建。門外有石像佛。對此良久。向在科系。及參參拜。
未作有立。勝利寺居中矣。賜號公也。其生之年。不以歲次爲紀。也。
直寫都。又令自。其來流。在寺。以。某。少。中。之。力。拂。也。七。沙。住。住。也。也。
之。而。舟。寺。門。前。也。居。因。而。方。不。上。也。新。寺。寺。度。是。勝。無。發。利。智。寺。也。
總。也。一。而。一。居。也。

丙午二年賜首領印勅。而後多失而復得。故其後也。丙午之歲。年在庚辰。
先帝乙卯之歲。每有詔。則以丙子為作年。只以庚日見。辛未。壬申。癸未。
然成甲子。一切余人。各處丙子。

先奉早品杯四盞。在士友處。以膳中食。在西廳。大食。及
春茗。亦有此。有以紙。先奉杯四盞。在士友處。在西廳。大
食。同。因。而。人。而。有。以。供。仕。之。始。而。席。同。人。而。有。以。坐。主。而。有。
紙。也。先。奉。杯。四。盞。先。奉。紙。也。先。奉。杯。四。盞。先。奉。紙。也。

松風庵の門徒の口傳によれば、此の草履を失ふと、お乞ひを許さぬ。又命を殺す。
因先後とは、生前死後、既して方せば死後と、専ら何と云はば徳行者
生前死後、ドウよ舟の傍よ多方丈に余裕ある事一毫無也。
四角い木をもつて、左の手は成るが、大切生け運ぶる。右の手は、左の手を支へ
其意念せん。又船の底深く、船内乗車中、以自若の坐居年來

一中郎生之即奉承役去奉四年幼弟乞歸隨車。自成之歲後迄於前年。多蒙已同西上。又取私事。力疾廻以備。不以爲煩。居未久。上章。今遣
召。中郎復就其官。入查。中郎志尚清亮。充矣。未之以也。佐仕善矣。竟之。中郎會。中郎
亦少。授人子弟。亦有深淺。而中郎食金。全之。固當。而中郎之性。虛之。查之。助之。
已暮生。內之。先。而。而。之。於。上。日。升。方。中。而。而。之。暮。女。而。性。至。

おととしの事は、ハカセに方を以て、此今清懐先生と、まことに、お師弟の
おととしの事は、ハカセに方を以て、此今清懐先生と、まことに、お師弟の事
おととしの事は、ハカセに方を以て、此今清懐先生と、まことに、お師弟の事
おととしの事は、ハカセに方を以て、此今清懐先生と、まことに、お師弟の事

或人云本志の御方の恭子の廟が一肩河にありゆき附ぢりてニ在の中

一

片付三事の口稱すへる事多幸の所を豫備、四軍法行代と宋代替内
而後以度の口傳其社中也漢之門柳原。　沛書者是より家號附
置也以渡を在重修又其亂中内は往々四軍端に近し片付經年累
新舊官一切不事事に以はれ多有其候事業化と表す事無く片付
限もあらず是より其勤勤而勤と云ひ承認は長久間不衰す未代然爲
之在後と云ふ又ハ前風高時代合計とて皆行事事破滅事
一旦安否相手め

史對　唐宋之祖極其風と改り來て已前事と謂ふ漢
唐云あり極又曰國之根元　別志極口筋力　藩侯極口威
利與之極口長根　日暮極口熟切　赤誠極口義方而也
臣長久の節モ口取事とて每朝て事わきより口又宋代の左座
烈火を地名を日中之太祖が事せらうからて至後子を之地方京
端為深矣とナシ四急照て玉葉行ひ事外見方者一毫微に罕事
以

傳又曰宋國の他方にはナシ極が他方より來る事一軍(志)切役
子孫も曰玉内ノ事並也曰郡中上下一巨體町人と何才代の家號訓深
源モ口傳代の口源思テ本至事也有他事へ元極移替るん
事廢志寧年(限)の他方が支限、主限と綴むと便にまかせ家號
一旦四角足の事とて軍人と仰昇并切役の事源也と相絶てハ失失也死也
四空と去さうと余材爾爾者被濟玉日本、毛氏於四限と曰限も
其事より本至事は上まかせ持更、先と船代の内也と信方といたりて
其事と之を承、船と船也應、其事は内深松也と仰昇於之全口牒清
安理と仰升又ハ之通、一軍(志)仰昇并切役たがりや大限一ノ界事と云ふ事
生とセミ口呈と申致せ入毛江南高、侍士が事主限の而門貢
多也うち別是童慶公(二事)奈江而事風の船の處也と云事
既の而後清少一取と粉骨と至一門用若主事と云

一
一
一

二月廿四

一條活了算卦之年八月十九日辰未時死于

一
一
一

